説教要旨「困った時の神頼み」

ルカによる福音書　２０章４５節～２１章４４節

「律法学者に気を付けなさい」（20:46）。そう言ってイエス様は弟子たちに注意を促します。彼らは外面では律法を厳格に守る信心深い者と見せかけていますが、実際は神が求めておられる最も大切なへりくだった魂とか慈愛の心から遠く、「偽善者」で、「目の見えない案内人」にすぎないと、厳しく指摘するのです。「自分は神の御心を知っている」と驕る彼らは、「人一倍厳しい裁きを受ける」（20:47）ことになるとまでいうのです。

そして、金持ちたちが賽銭箱に献金を投げ入れているのに混じって、貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を投げ入れていることに、イエス様は注目するのです。レプトン銅貨二枚はささやかな金額ですが、その日暮しの寡婦にとっては、その日の食べ物を買うための大切な生活費です。イエス様はその様子を「この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである」（21:3-4）。と評しています。

彼女は持っているものが極端に少なかったから、すべてを献げることが出来たとも言えます。もはやあってもなくても同じこと。ならばいっそ「神様責任とってください」とすべてを献げてしまおうという思いで、このやもめは全財産を投げ入れたのかもしれません。その泥臭さこそが“信仰”なのではないでしょうか。まさしく困った時の神頼みです。

もはや自分の力ではどうにもならない状況にありながら、それを認めようとせず、変に取り繕おうとするならば、それこそあの律法学者のように、見栄を張り、知ったかぶって神の代弁者をきどってしまうということがおこってくるのです。

自分の無力さ、愚かさ、身勝手さを受け入れるならば、そこでこそ私たちは神にすべてを委ねることが出来るはずです。それはなにか美しく崇高な“信仰”ではありません。もっともっと泥臭く「自分ではもうどうにもならないから神様責任とってください」。と訴える身勝手な思い。それが私たちの、取り繕うことのない泥臭い“信仰”なのです。

（２０２０・９・６　説教者：稲垣真実）